

## 1〇専門学校内・教室 (D)

安部沙希 (21) が椅子から立ち上がり、走り出す。(ここはそのカメラ視点で)

御来屋 「はい、カットー」

御来屋 (21) が腕組みをしながら号令を掛け、カチンコの音が二回響くと、現場は一斉に緩んだ空気になる。その場にいた人たちが忙しなく動き始める。

撮影用照明が一斉に消灯する。

照明の後ろで音響さんがマイクを下している。

音響さんの隣でカメラマンの沢村優 (21) はドリーからカメラを下す。

出演者の安部、最初の椅子の位置に戻ってくる。その息は乱れている。

照明の石渡麻緒 (21) は軍手を外しながら安部のところに行き、安部のスタート位置で顔のところで露出を計っている。

右端の壁に寄りかかり、一歩も動かず、御来屋を見ている櫻見珠希 (21)。

櫻見は右手に台本を持っており、その台本には細かにカット番号などがふられている。

御来屋 「ごめん、沢田くん！もう一回撮りなおしていい？」

御来屋がビデオチェックをしながら、少し離れた沢村に話しかける。

沢村 「ん、なんかあった？」

御来屋 「いや、画面から安部さんが出ていかなかったんだよ」

安部 「……え」

安部は息を整えながら、名前を呼ばれ御来屋の顔を見る。

御来屋 「あ、で安部さんは次、その椅子まできたら左に曲がってもらっていいですか？

そうじゃないと画面内からでてけないんで」

御来屋は安部さんに気にした様子もない。

安部 「え…あ、はっ」

安部は何か言いたそうに口を開くが、軽く深呼吸をして誤魔化す。

石渡 「御来屋ー、ちょっと来てー」

照明の位置を少し調整している石渡。

石渡に呼ばれて振り返る御来屋。

御来屋 「あ、はいーごめん、すぐ戻ってくるんで」

安部に少し振りかえり会釈して、石渡のほうに走っていく御来屋。

御来屋が通って行く、カメラに映らないであろう机にレフ板やら、小道具箱、カメラ入れ、化粧ポーチなどが散乱している。

そこで携帯をいじりながら暇つぶしをしていたキャストの一人、楠本優菜 (21) が、御来屋の後ろ姿に声をかける。

楠本 「御来屋ー、私の出番まだ？」

楠本は所々に落書きされた台本を持ち、御来屋に問う。

御来屋「えっと、楠本さんはあと、ちょっとしたら…」  
楠本「早くしないと教室閉まっちゃう時間になるよ」

楠本は携帯を開く。

御来屋「大丈夫です、あと少しなんです」

楠本「ふーん、早くしてね」

楠本はそう言うつと机に向かい、手元の紅茶を口に含んで、携帯を弄り始める。

御来屋は気にした風もなく、石渡のところへ向かう。

石渡「御来屋、どうしても窓からの光でアゴとか、あとほっぺたの下に影出ちゃうじゃない。

計ったらEVKは差があるからな」

御来屋「あー、まあね」

石渡「で、さっきのメイクはソフトボックスで起こしてみる方向でやってただけど」

御来屋「うん」

石渡「そんだと明る過ぎちゃって、ほぼフラット…」

御来屋「あー、わかった、じゃこれレフで起こしてみたら？」

御来屋は石渡の言葉を遮る。

石渡「方向的にできるかな」

御来屋「光源はソフトボックスでさ。誰かレフ持ってるー!？」

大声を出して現場に聞く御来屋。誰も御来屋に対して返事をしない。

御来屋「じゃ楠本さん持ってきて。下の階にあるから」

楠本「は？ え、あたしキャストとして呼ばれたんだけど…」

御来屋「え、暇ですよな？」

楠本に即答する御来屋。

沢村「御来屋ー、まだあ？」

沢村が声を張り上げる。

御来屋「すぐ行くー」

御来屋は沢村の声に首だけ向ける。

御来屋「じゃっー」

石渡に手をあげ、壁際においてある自分のカバンの中から絵コンテを取り出して、

安部の元へ向かう。

安部は手にコップを持って櫻見と話している。

御来屋は安部と櫻見の間に入りこむ。

御来屋「じゃあ、安部さん、さっきのどこなんだけど…」

安部「えー」

安部が驚いて肩をビクつかせたため、コップの紅茶が少しはねる。

跳ねた紅茶が安部の服につく。

御来屋「で、その椅子あたりで曲がる少し前に、『佳奈！』って叫んでもらうっていい。」

御来屋はそれに気づかず話し続ける。

櫻見「ねえ御来屋、いきなり間に入ってこないですよ、危ないよ。あとその台詞、次のカットで言うやつなんだけどなあ……」

櫻見は安部の前に回り込んで、首をかしげながらにこやかに笑う。

御来屋「ごめん、でも急いでるし。てかこれ、次のカットとアクション繋ぎする予定なんですよ」

御来屋は持ってきた絵コンテを指差し、櫻見に見せる。

御来屋「あの、画面の事をシナリオの人がとやかく言わないで貰えますか？」

御来屋は櫻見に馬鹿にしたような見下した目でうざったそうに言う。

櫻見「はっ」

櫻見は御来屋の言葉に目を見開く。

御来屋は櫻見の言葉を遮るように言う。

御来屋「すみませーん、もう一回同じカットいきます。レフまだ？ 早くしてー」

御来屋は気にした風もなく、カメラの所に行く。

それを恨めしそうに睨んでいる櫻見と安部。

御来屋「それじゃテイク2行きます、カチン」出してスタッフ「ラーすー」

照明機材が一斉に点灯する。慌てて準備されたレフをスタッフが持って駆け寄る。それを待つて御来屋が号令をかける。

御来屋「よーい、アクションー」

カチンコの音が響く。

入り口の側に居る櫻見。側には関口も。

## 2〇専門学校・機材室前

機材室の入口にカメラバックと音響機材、レフ板、ごちゃごちゃしたコードなどが置かれている。

村山慶二（38）先生が屈みながら機材貸し出しカードを持ちながら機材を確認している。

確認が終わり、じっと御来屋と沢村を見る村山。

緊張しながら村山の言葉を待つ二人。

村山「よーい、全部あるな、帰ってこーな」

村山は機材貸し出しカードの最後の欄にスタンプを押し、立ち上がり御来屋たちの方へ振り返る。

御来屋・沢村「ありがとございしました」

御来屋と沢村二人揃ってお辞儀をし、機材室からでていく。

村山「あ、そつだ御来屋！」

村山が閉めようとしたドアから、顔をのぞかせる。

御来屋「なんですか？」

御来屋と沢村は足を止めて振り返る。

村山「撮影は順調か？」

御来屋「まあ、概ね」

じつと御来屋を見つめる村山。

村山「…そうか、監督は大変だろうが頑張れよ」

村山は満面の笑みを浮べてドアを閉めていく。

御来屋「はー」

御来屋と沢村は村山を見届け、置いてあった自分の荷物を背負う。

御来屋は自分の撮影用カバンを背負う。

沢村「そつだ、今からメシ食いにいかねえか？ 良い中華料理屋見つけたんだよ」

ちよつと戸惑う御来屋。

御来屋「え、今から？」

沢村「そつ。安いのも良いトコんだが、店長が映画好きでさ、すっげー面白いの」

御来屋「あー、いや、いいよ俺は」

沢村「ああそう？ 別にそんなら良いんだけど」

御来屋「ああ、悪い。夜バイトあって」

沢村「いや、別に良いんだけどさ。ま、たまには付き合えよ、印象に響くぜ」

御来屋「まあなあ」

会話が途切れる。

沢村「…俺ちよつとトイレ」

御来屋「いつてら」

沢村がトイレに入り、御来屋一人になる。

周りはほぼ無音。

次の瞬間、マイクの音が途切れるようなボンボンという異音（ノイズ）がする。

背景の壁に、なにか棒状の物の影が一瞬映る。

御来屋「えっ…」

御来屋はぼつと、後ろを振り返るが誰もいない。

御来屋「…また、か」

御来屋はため息をつき、唇を右手の親指でなでる。

沢村がトイレから出てくる。

沢村「どつした？」

御来屋「いや、なんでもない」  
と言いつつ、首を傾げる御来屋。

### 3 ○バイト先の文具屋(2)

商店街を歩いてくる御来屋。

向かう先は、商店街の真ん中にある文房具店。

店内、制服であるエプロンを着けてレジに出てくる御来屋。

先にレジに入っている秋葉草太(22)に声をかける。

御来屋「よう」

秋葉「よう、今日もロケ？」

ポケットに入っていた携帯の時計を見る御来屋。

御来屋「まあね」

秋葉「へー。最近あんまバイト入ってないよな」

御来屋「ああ。なんか、今グループ制作やって、俺監督とカメラ両方任されてるから

や」

秋葉「へえ、お疲れ。監督とカメラ両方かよ、大変そうじゃん。それ一人でやれるもんな

の？」

御来屋「まあ、大変は大変なだけだよ」

ちよつと自慢げな表情をする御来屋。

御来屋「ゼミでも両方なんて、俺にしか出来ないからさ。仕方ない」

秋葉「すごいな。ま、でも無理すんなよ」

丁度そこで買い物がレジに並ぶ。

御来屋・秋葉「いらっしゃいませ」

買い物客の対応をする二人。

### 4 ○帰り道の道路・押しボタン式信号のある交差点(2)

バイト先からの帰り道。

押しボタン式信号のある横断歩道を渡る御来屋。

### 5 ○御来屋の部屋(2)

自分の部屋に入ってくる御来屋。

持っていた鞆を放り出して、ベッドに腰掛ける。

一息ついて、鞆の中から卒業制作の企画書を取りだし、机に向かう御来屋。

企画書はびっしり文字が書き込まれている。  
 引きだしから参考資料やプロットを取り出し、ボールペンを動かし始める御来屋。  
 部屋は静かで、カチコチと時計の音だけがする。

× × ×

すでに朝になっている。

目覚まし時計の音が鳴り、もぞもぞと起き上がる御来屋。

御来屋は机の上の企画書類を鞆につめる。

鞆を持ち、部屋を出ていく御来屋。

## 8 ○編集ブース

編集ブースでひとり#1で撮った素材を編集している御来屋。

御来屋は耳にイヤホンをしている。

すると、時々ブーっというマイクに入ったノイズのような音が聞こえてくる。

編集素材を巻き戻し、ノイズが聞こえた所を再生するが、ノイズは聞こえない。

一時停止ボタンをクリックし、首を傾げる御来屋。

突然、再生もしていないのに大音量でノイズが鳴る。

それと同時に何か（マイクブーム）が倒れた音がする。

ようやく編集ブースの外からの音であることに気づき、編集ブースから外に出る。

すると、地面にマイクブームを取り落とした関口夏樹(18)が居る。

関口はマイクブームを拾い上げたところで、こちらにすぐ気づく。

御来屋「大丈夫ですか？」

関口「……あ」

関口、一度カメラの方へバツと勢いよく振り向いて困った顔をする。

御来屋は関口の動きに目を見張りつつ、問う。

御来屋「機材は大丈夫ですか？」

関口はゆっくり、御来屋のほうへ顔を向ける。

関口の眉間には皺が寄っている。

関口「ええ、大丈夫です」

関口は体の向きを御来屋に向ける。

関口「…お騒がせしてすみません」

御来屋「そうですか、では」

御来屋は肯き、編集ブースのドアに手をかけようとして止める。

御来屋は首を傾げ関口の方を見る。

御来屋「あれ、映画学科の方ですよね？」

関口「あー、はい、まあ」

ちよっと戸惑ってから応える関口。

御来屋「録音専攻の方？」

表情を変え、僅かに唇に微笑みをたたえつつ関口は答える。

関口「ええ」

御来屋「そうですか、どうも」

それだけ言ってまた編集ブースに戻る御来屋。

編集ブースに入ってから関口のほうが気になり何度か振り返る。

御来屋「あんな人居たかなあ？」

御来屋、もう一度編集ブースから顔を出してみると、既にそこには誰もいない。

#### 6〇専門学校・教室 (D)

□の字型に机が置いてあり、机のない方にはスクリーンが置いてある。

村山を真ん中として座っていて、御来屋は村山の右の近くに座っている。

櫻見はスクリーンに近い方に座っている。

スクリーンには御来屋たちが作った作品のエンドロールが流れている。

村山は一人頷き、御来屋を見る。

村山「撮影は誰だ、沢村だっけ？」

沢村は名前を呼ばれ立ち上がる。

沢村「はい」

村山「君もさすがだ、撮影ミスも無くとても良い」

沢村「ありがとうございます」

沢村は会釈をし、座る。

村山「内容も良いね。中間で指摘したところは直ってるし、見たいところがちゃんと見える構造になっている」

御来屋「ありがとうございます」

御来屋は村山の方を向き会釈する。

村山「敢えて言うなら、もう少し会話の間を大切にしてくれただけ…まあ、そんなところかな」

先生が座っている生徒を見渡す。

村山「みんなお疲れ様。そして、お疲れの所申し訳ないが、次の課題の話に移る。これを」

村山が両脇にいる（右が御来屋）生徒にプリントを渡す。

村山「いよいよだが、グループ制作としては最終課題になる、卒業制作だ」

プリントを回していく生徒達。

プリントには安部、石渡、御来屋の名前、卒制の予定表、注意事項が書かれている。村山「そこに書いてあるとおり、今回の課題で企画が通ったのは、安部、石渡、御来屋の三人になった」

御来屋、安部、石渡奈緒（21）を他の生徒が見渡す。

櫻見は御来屋を見た後、安部に目配せをする。

プリントを見ていた安部もそれに応える。

石渡はプリントを見るのとはず、折りたんでファイルにしまっている。

村山「私はもうほとんど口を出さないから、二人を中心として、これまで通り、協力し

合ってやってほしい」

御来屋は一人で予定表に丸をつけ始める。

村山「機材の貸し出しは明日から、先にシナリオの決定稿を提出してから、貸し出しカ-

ドを持って来るように。では、解散」

#### 7〇専門学校・教室（D）

上映会の机の位置から、講義時の状態に机が並び替えられている教室。

櫻見の隣には安部と楠本がいる。

安部の隣には沢村がいる。

御来屋は一人で少し離れた位置で卒制のプリントの予定表をスケジュール帳に写している。

櫻見「じつじつかさ、マジ気持ち悪くない」

楠本「確かにー。マジないわー」

櫻見と楠本が御来屋の方を見て小声で笑う。

御来屋は気付いていない。

櫻見「ねえ、優くんもそう思うでしょー」

沢村は櫻見と御来屋を見比べて、苦笑する。

沢村「まあ、あれは無いわなー」

櫻見「絶対そうだよーだって」

御来屋が沢村に向かって歩いてくるのが見えて口をつむぐ櫻見。

御来屋「沢村くん！ちよつといっ？」

御来屋が沢村を手招きする。

沢村「…なにー？」

沢村は御来屋の方に走って行く。

櫻見は御来屋をじろつとみて嘲るように笑う。

御来屋「俺の卒制の予定日なんだけどさー」

御来屋は笑顔で沢村にスケジュール帳を見ながら言う。

沢村「あー、どうだろ、時間が空いてるかわかんないんだよな…安部とかと相談してみないと」

沢村は言いにくそうに、もじもじしながら言う。

御来屋「了解、また予定わかったら言うて」

沢村「ああ、ごめん」

沢村は苦笑する。

#### 9〇文具屋休憩室

休憩室には御来屋しかない。

スケジュール帳を見ている御来屋。

がちや、と音がして店長の津川光良(52)が休憩室に入ってくる。

御来屋「あ、店長」

御来屋は慌ててスケジュール帳を背中に持っていき、津川に会釈をする。

津川「おお、みーくんお疲れ」

津川は置いてあった6個ほど積み重なった段ボール箱を抱えようとする。

御来屋「あ、俺手伝いますよ」

御来屋はスケジュール帳を急いでバックに入れて店長の元に駆け寄る。

津川「助かるよ、相変わらずみー君は気がきくね」

津川は段ボール箱を三個持ち上げる。

御来屋「いえ、これもバイトの仕事だと思ってますから」

御来屋は段ボール箱三個持ち上げる。

津川「そっかな？」

津川が歩き出し、レジに向かって段ボールを運んでいく。

御来屋「そうですよ」

御来屋もそれにならんで歩き出す。

津川、レジ横に段ボールを置きながら話しかける。

津川「そっいえば、みーくん、まだ来月のシフト出てないけど、今日中に出せる？」

御来屋もならってその横に段ボールを置いて、唇を右手の親指でなでる。

御来屋「あ、その話なんですけど」

津川、レジからバックヤードに戻ろうとしている。

御来屋「また、次の作品でも監督を任されたので、来月はあまりシフト入れられないかもしれないです」

津川が立ち止まり、振り返る。

御来屋、それに驚いて静止する。

御来屋「店長？」

津川「御来屋君、君が、がんばって映画を撮っているのは知ってるし、悪いとは思わないけど、今月もそんなにはいってなかったよね」

御来屋「……は？」

御来屋は津川の目を見られなくなって下を向く。

津川、思い出したように後ろの棚から封筒と書類を取り出す。

津川「そつそう、今印鑑持ってる？」

御来屋「あ、は？」

御来屋、あわててポケットの財布からシヤチハタを取り出す。

津川、御来屋のほうに歩み寄り、書類（給料の受領書）を示す。

津川「は？、こっ押っつ」

御来屋、シヤチハタを書類に押す。

津川「はい、じゃあお給料」

津川が御来屋に封筒（給料袋）を差し出す。

御来屋は封筒（給料袋）を津川から受け取ると、封筒の中からお金のあたり合っ音がする。

御来屋「ありがとっけいさます」

そつ言っって印鑑をしまっている御来屋に向かって、つぶやく津川。

津川「ただ…映画って言っただって、学生の遊びもいい加減にした方がいいんじゃないか  
さっ」

御来屋は津川の言葉に勢いよく顔を上げる。

御来屋「映画は、遊びとかそんなつもりでやってるわけじゃ…」

津川「みーくん、君、就職先とか、どうなってるんだい？」

御来屋は開けた口を閉じ、下を向き、唇を右手の親指でなでる。

御来屋「まだ……専門通じて、就職活動してる最中です」

津川「趣味ほど、仕事にして辛いものはないと言っしね」

津川がぼそっ、と呟くように言っつ。

御来屋「えっ」

御来屋は顔をあげる。

津川「いや、いめん。それは言っいすぎかな」

出て行く津川を見送ったあと、給料袋を丁寧に開封する御来屋。  
中から百円玉が三枚転がりでてくる。

10〇文具屋・従業員出入口 (2)

百円玉一枚と十円玉八枚、そして缶コーヒーを持って、従業員用出入口に居る御来屋。

外は雨が降っている。

秋葉が後ろからやってくる。

秋葉「おっ…雨か。お前は傘持ってる?」

御来屋、黙って足下に立てかけてあったビニール傘を指し示す。

秋葉「あ、そう」

秋葉、自分の荷物の中から折りたたみ傘を取り出そうと、荷物を下ろしてしゃがむ。

秋葉「店長となんかあったのか?」

御来屋「ああ、ちょっとな」

秋葉「シフトのことか」

御来屋「良くわかったな」

秋葉「お前は店長のお気に入りだから、気にすんなよ」

御来屋「…いやさ、卒業制作で企画通ったから、来月もほとんど入れないなって。そのかわり、自分の好きな作品が撮れるんだよ」

秋葉「へー、…どんな撮るの?」

御来屋「企画書みる? ちょっと実験的な内容で難しいかもだけど」

御来屋、コーヒーを置いてバックからホチキス止めされた企画書を取り出し、秋葉に渡す。

企画書は、清書されてはいるものの、とてもびっしり文字が書かれている。

秋葉、それを受け取ってぱらぱらと斜め読みする。

秋葉「へえー…難しいことやろうとしてんだな」

御来屋「まあね」

秋葉、企画書を返しつつ台詞。

秋葉「はい、でもお前頑張ってるんだなあ」

御来屋「だろー? まあ好きでやってるからな」

秋葉「むしろ、好きな事が義務になるって考えたら、ちょっと怖いけどな、俺は」

御来屋は缶コーヒーを飲み、口を付けたまま、缶の底をポンポンと左手で叩く。

最後の一滴まで飲みきり、缶から口を離して、近くの空き缶入れに缶を投げ入れる。

秋葉もそれを見て傘を広げる。

秋葉「じゃ、また…明日かな?」

御来屋「っん、明日」

御来屋も傘を広げて歩き出す。

従業員出入口のドアが閉まる。

## 11○専門学校・教室 (D)

同級生A「いや、悪いけど今回はパス」

同級生B「ごめんね、私安部さんの企画でメインスタッフやるから…」

同級生C「ちょっと今回は厳しいかも…」

同級生にスタッフ・キャストの依頼をしているものの、断られている御来屋。

御来屋「…なんで参加できないんだ？」

同級生C「いや、安部さんのほう手伝うことになってさ…櫻見さんに頼まれちゃって」

御来屋「櫻見さん…？ …そうか、了解」

同級生の元を離れ、沢村のほうに歩いてくる御来屋。

御来屋「沢村くんあのさ、俺の企画の撮影日程なんだけど、まず打ち合わせを15日…」

御来屋は撮影日程を取り出し、説明しようとするが…。

沢村「あー、御来屋ごめん。俺、安部さんの方の撮影監督やることになってさ」

御来屋の顔引きつる。

御来屋「え、でも」

沢村「そっちいつも通り人余ってるだろ、ほら、安部さん初監督だからさ、悪い」

沢村は手を前に出し、掌を重ねながら謝る。

御来屋は茫然としている。

沢村「じゃ、本当にごめん。まあなんかあったら言うてよ」

沢村が御来屋の目の前から去っていく。

御来屋は何もできず、立ちすくむ。

櫻見「大変ね、御来屋くん」

御来屋「えっ」

突然後ろから声をかけられ、びっくりし振り返る御来屋。

歩き去っていく櫻見の後ろ姿を呆然と見ている御来屋。

御来屋「櫻見…」

御来屋は唇を右手の親指でなでる。

ハッとしたかのように立ち上がり、櫻見を追いかける。

## 12○専門学校・廊下

御来屋はドアを開け、左右を見渡す。

櫻見は数メートル先を歩いている。

御来屋は櫻見を追いかける。

御来屋は櫻見の右手首を左手で掴む。

御来屋「櫻見さん！」

櫻見「いきなりな?」

櫻見は振り向き、眉間に皺をよせる。

御来屋「あんたが、何かしたんだろー!」

御来屋は櫻見を睨みつける。

櫻見は握られた右手首を見て言う。

櫻見「なんの話? ていうか、手離してもらえない? 気持ち悪いんですけど!」

櫻見が軽く右手首を左右に振る。

慌てて御来屋は手を離す。

御来屋「あんたなんだろ、沢村くんたちをとりこんだのは!」

御来屋は叫ぶ。

櫻見が顔を歪める。

櫻見「取り込む? 失礼なこと言わないでくれる?」

…あくまでみんな安部さんの企画に参加するってだけでしょ?」

御来屋「え…」

櫻見「…あなた、自覚内みたいだから教えてあげるけれど…あなたいつも、全部自分の思い通り、好き勝手に現場を引っかき回して、みんな迷惑がってるのよ!」

御来屋「だからって…」

櫻見、ふんと鼻で笑って。

櫻見「いつも自分は真剣に映画を作ってますみたいな顔して、人を見下しまくってる貴方自身のせいでしょ? 見捨てられたのは!」

櫻見、それだけを言い切ると、御来屋を無視して、堂々とした足取りで歩き去る。

御来屋「あ……」

御来屋は櫻見を見つめている。

御来屋は唇を右手の親指でなでる。

### 13〇御来屋の部屋

スケジュール帳を見ながら片手に携帯を持っている御来屋。

机の横ではプリンターが台本を印刷している。

御来屋「なあ、俺の企画出られるよな? なあ? ……っ、マジか…」

御来屋はそれだけを吐き捨てるように言う。通話終了ボタンを押したため息をつき、携帯を机に投げる。

スタッフ表(何人かの名前が書いてあるやつ)の1つの名前に×をする御来屋。

書いてある名前の半分以上に×が書かれている。

御来屋「なんで……」

御来屋は唇を右手の親指でなでる。

御来屋はもう一度携帯を手に取り電話かける。  
御来屋「あ、俺の企画の日程の話……そっか」

電話切ると、最後の台本を印刷し終わったようで、プリンターの作動音がしなくなる。

御来屋は刷り上がった台本をトントンと、端をそろえ始める。

御来屋は唇を右手の親指でなでる動作を何度も繰り返す。

机上には白紙のコンテ用紙が積んである。

#### 14〇専門学校・校舎前

安部、櫻見、楠本、沢村他数人が機材を持って校門へ向っている。

御来屋が校門から歩いてくる。

御来屋は櫻見たちを見つけ、少し離れて歩こうと右側に少しずつ寄って行く。

櫻見が御来屋を見つけ、笑いかける。

御来屋の口元が引きつる。

櫻見「御来屋くん、そっちは順調？」

御来屋に少し駆け寄るようにして櫻見は楽しそうに笑いかける。

御来屋「え、いや、まあ」

御来屋はどうか口角を上げる。

櫻見「なにかあったら、手伝うから言ってみてねえ？」

櫻見はにっこりと微笑み、御来屋の目の前から去っていく。

御来屋「なんなんだよ……」

御来屋は眉間に皺を寄せ、唇を右手の親指でなでる。

肩に掛けていたカバンがズリ落ち、それを背負い直す。

#### 15〇専門学校・教室

村山と御来屋が対面式に座っている。

村山は『本格世界宣言(仮)』と書かれた御来屋の台本を読んでいる。

御来屋は背筋を伸ばし、唇を引き締めている。

教室には台本をめくる音しか聞こえない。

村山、台本を読み終わってパタンと閉じる。

村山「うん、いいんじゃないか」

村山が台本から顔を上げて言う。

御来屋「本当ですかー」

御来屋は口元を緩め、村山を見つめる。

村山「ああ、今回の卒制の中でも一番じゃないか？」

村山、再度ぼろぼろと台本をめくりながら「コメントを付ける。

村山「まあ、メタフィクションとかあるし、ちょっと実験的な内容になるが…まあ君なら

出来るだろう。これで行く」

御来屋「ありがとございませう」

座ったまま、軽く頭を下げる御来屋。

村山「そついえば、まだ撮影スケジュール表が出てないが…そのへん大丈夫なのか？」

表情を曇らせる御来屋。

御来屋「まあ、なんとか…」

村山「まあ、お前なら大丈夫だろうが、あ、そうだ」

御来屋「？」

村山「お前、うちの今年のカatalogも見たか？」

村山はそつ言いながら、専門学校のパンフを取り出す。

御来屋「いえ、まだですが…」

村山「言ったかな、映画学科の紹介で、お前のことであつかく取り上げさせて貰ったぞ、ほら」

パンフの二ページ目、映画学科の紹介ページに、でかかど御来屋の写真とインタビュー記事が載っている。

それを指し示す村山。

村山「…うちの学校のなかでも、お前は際だつて優秀だからな、こちらとしても将来に期待してるんだ」

パンフを受け取つて、まじまじと自分の記事を読む御来屋。

村山「なんとしても君には良い作品を撮つて貰つて、賞を狙つて欲しい」

村山の言葉にリアクションを返さず、ずっとパンフを見つめる御来屋。

#### 16〇専門学校・廊下

御来屋は、台本と先ほど貰つたパンフを手に持ったまま、廊下を歩いて行く。

パンフをじつと眺めている御来屋。

物音ひとつせず、あたりには御来屋の足音しか聞こえない。

突然、マイクに入ったノイズのような音がする。

御来屋「えっ……」

御来屋はぱつと、後ろを振り返るが誰もいない。

御来屋「…はあ」

大げさなため息をついて歩き出そうとする御来屋。

振り返つた瞬間、そこにはマイクブームを持った関口が居る。

思わずぶつかってしまい、パンフや台本を取り落としてしまう。  
まどめていなかった台本はばらばらに床に散らばる。

関口「……大丈夫ですか？」

御来屋「あ、え、すみません」

御来屋はそう言いながら、しゃがみこみ、床に散らばった台本を拾い始める。

関口はそれを見て、一瞬御来屋を見つめると慌ててマイクブームを壁に立てかけ、  
台本拾いを手伝い始める。

御来屋「すみません、手伝わしてしまえ」

関口「あ、大丈夫ですよ」

二人で手際よく台本を拾って行く。

その中から、色つきの表紙の、ホチキスでまとめられた台本を拾い上げる御来屋。

御来屋「これは……」

関口「あ、それ私のです」

御来屋「あ、はえ」

台本を渡す御来屋。受け取る関口の顔を見て、ようやく誰か思い当たる。

御来屋「あの……こないだ編集室で会った人ですよね」

関口「編集室……ええ、はえ」

関口は台本を集め終わり、トントンと整える。

関口「はえ」

御来屋「ありがとうございます」

それを受け取る御来屋。

関口「あ、ページばらばらですけど……」

御来屋「いや大丈夫です、あとで直しますから」

関口「そうですか」

関口は少し離れたところに落ちていたパンフを拾い上げて、中を見る。

関口「へえ、良く出来てる」

御来屋「……そうですよね、うちみたいな専門学校としては豪華なパンフです」

関口「……ええ」

台本を全部もってもう一度手の中で整えながら、今度は御来屋が関口に訪ねる。

御来屋「えっと、その作品は、あなたの作品ですか？」

関口「その…… ああ」

丸めた自分の台本を示す関口。

関口「いえ、これは単に録音の手伝いやってるだけです」

御来屋「そうですか……」

関口「…ほんと私も監督やりたいんですけど、監督やるには早すぎるって言われて。まだ一度もメガホン持ったこと無いです」

御来屋「ああ…」

ちゅっつと気まずい御来屋。

関口「御来屋さんみたいに、才能があるって言われてる人にはわかんないかもしれませんが」

関口は大きなため息をつく。

御来屋「いや、そんなことないですけど…」

御来屋は顔を関口から逸らす。

関口「いや、ごめんさい。僻み(ひがみ)だって判ってるんですけど。なんか、学生時代からこんな使いつ走りみたいなことばっかやって、なんだかなって」

御来屋「そんなの俺も一緒ですよ。なんか今ぜんぜん思い通りにいかなくて、すっごいストレス溜まってたりして。面倒なときなんか、責任の無い一般人が羨ましいです」

関口、パンフを御来屋に返す。

御来屋「ありがとうございます。…まあ、どの立場に居ても疲れるのは一緒ってことなんですかね。隣の芝生は青いというか」

関口「まあでも、御来屋さんはまだ恵まれてるじゃないですか。監督だってスタッフだって好きにやらせて貰える」

御来屋「まあ、確かに…」

関口「なんていうと単なる嫌味になっちゃいますけど」

そこまで言いつて、慌てて取り繕う関口。

関口「というか、どうもいきなりこんな失礼な話してすみません」

御来屋「いや、うちがこそ…その、なんで俺の名前を？」

関口、ちゅっつと戸惑って。

関口「…いや、これに書いてありましたから」

パンフを示す関口。

御来屋「あ、そうか…。ええと、聞いても良いですか。あなたの名前は…」

問いかけた瞬間、立てかけてあったマイクブームが倒れる。

御来屋「あー」

関口「あ、やっちゃった」

関口、マイクを拾い上げ、御来屋に向き直って台詞。

関口「私の名前は、関口夏月です。録音の」

## 17〇撮影現場・公園 (D)

御来屋がカメラを持っている。

キャスト女の子が動くのを撮っている。

石渡「カッター」

石渡の一声で現場がざわめき始める。

御来屋「石渡さん、テープチェンジしとくよー」

御来屋がカメラの画面を見ながら、机の上に置いてある真新しいビニールの包装が  
されているテープを手取る。

石渡「了解！ テープ机の上に置いといてー」

御来屋「はい」

御来屋はビデオを三脚から外し、テープを取り出す。

石渡「じゃあ、次のカットはこの続きからいきます」

スタッフ「はい」

御来屋は真新しいテープの包装を取っている。

石渡「てか、御来屋が暇で協力してくれるなんて思わなかったよ」

石渡が台本を持ちながら、御来屋に歩み寄ってくる。

御来屋「そうですか？」

真新しいテープをカメラに入れながら問う御来屋。

石渡「だって、御来屋は自分の作品につきっきりだろうって思ったから。人のを手伝う

タイプに見えない」

御来屋は唇を右手の親指でなでる。

御来屋「いや、まあ自分の作品だけやってたら煮詰まっちゃいますから。てか俺、そんな

イメージなんです」

石渡「少なくとも、私の中ではね。じゃあ、すみませーんカット6から行きますー」

全員「うーいー」

石渡、主役のほうに歩いて行き、次のカットの説明をしている。

御来屋、振り返って後ろにいたスタッフAに向かって、一方的に指示を出す。

御来屋「あのさ、トイレ脇からレフ持って来て」

スタッフA「あ、はい」

スタッフAを見送るのもそこそこに、御来屋が三脚を移動させる。

その側に石渡が戻ってくる。話しかける御来屋。

御来屋「あのさ、アレ影入っちゃって邪魔なんだけどこかせない？」

石渡「アレって…ああ、彼女ね」

御来屋の視線の先には、待ち状態の楠本が居る。

楠本、アレと呼ばれたことに気づき顔を上げてむっとした表情を見せる。

石渡「あのさ、楠本さん、そこ影入るから移動してって」

楠本、返事はせずその位置から動く。

石渡「アレは無いでしょ、さすがに…。」というか御来屋、このカットカメラ正面からじゃない？」

御来屋は石渡の方に悪びれもせず振り返って言う。

御来屋「ここはサイドからがいいですよ」

御来屋は石渡を気にすることなく、三脚にカメラをつけようとする。

石渡「いや、ここは正面からだって、「コンテ見た？」

石渡はイフイラしたように御来屋に近づき、言う。

御来屋「コンテ見たから言うんですよ。このカット、心情的に絶対サイドからのほうがいいですよ。見てください」

御来屋は石渡を手招きし、画面を見せようと、横に少し動く。

そこにレフを持ったさっきのスタッフが戻ってくる。

スタッフA「レフ持って来ました」

御来屋「ああ、それね…」

それに答えようと御来屋その場を離れようとする。

石渡「あー、確かにサイドからの方が…」

石渡がもつとよく見ようと画面を覗き込んだ瞬間、石渡の腕がきちんと固定されていなかったカメラにぶつかる。

がっしょん、と大きな音をたててカメラが落ちる。

その場にいたスタッフ・キャスト全員が音のした方を見る。

誰も口を開かず、気まずい沈黙が流れる。

楠本もさすがに驚いた表情でそれを眺めている。

御来屋「…今の、石渡さんのせいですよね」

石渡の方に視線をやる御来屋。石渡は「えっ…」という目で御来屋を見る。

レフがばしゅん！と開いて慌てるスタッフA。

#### 18〇機材室前

村山が入口で仁王立ちをしている。

村山の足元にはカメラが一台置いてある。

石渡と御来屋は村山の目の前に立ち、下を向いている。

辺りはとても静か。

村山「今回はキズがいっただけで、壊れてはいないので、特別に許す」

石渡・御来屋「ありがとうございます」

石渡と御来屋は深々と頭を下げる。

村山「だが、今回だけだからな。今度機材管理甘かったら、石渡の撮影には今後機材を貸し出すことが出来なくなる」

村山は石渡と御来屋を睨みながら、機材貸し出しカードに判子を押す。

石渡と御来屋は頭が膝にくっつくぐらい頭を下げる。

石渡「はい、すみませんでした！」

御来屋「申し訳ありませんでした」

村山「次回はないからな」

村山はそつ良いながら足元のカメラを持ち上げ、機材室の入口を閉める。

石渡と御来屋はほぼ同時に顔を上げる。

石渡と御来屋はお互いを見る。

石渡「……」

御来屋「……」

お互い沈黙が流れる。

石渡「…行くっ」

御来屋「っっ」

二人とも歩き出す。

エレベーターの前まで来て、石渡は御来屋の顔を見ないまま、じぶちやくまうと言っ。

石渡「…正直、私は引いた」

御来屋「え」

石渡「いや、今回の事は私が悪いんだけど。うるうるど…櫻見さんの言っことも判る

わ」

思わず立ち止まる御来屋。

石渡、そのままエレベーターに乗る。

石渡「乗らないの？」

御来屋「…いや、ごさよ」

石渡「そつ」

エレベーターのドアが閉まる。

ひとりエレベーターの前で立ちすくむ御来屋。

御来屋「また、櫻見」

御来屋は唇を噛みしめつつ、その唇を右手の親指でなでる。

19〇文具屋・店内 (D)

レジ裏、ひとりの低い台に座ってちまちまとボールペンの在庫に値札を貼っている

御来屋。

レジ台を拭き掃除していた秋葉、客が居ないので御来屋に話しかける。

秋葉「前から思ってたけど、お前って作業早いよな」

御来屋「そうでもないけど…、値段覚えてるから確認しなくていい分早いのかもな」

秋葉「へえー。お前ってどんくらい前からこのバイトやってるんだっけ」

御来屋「んー、…もう2年くらいやってるよ」

秋葉「あ、でもまだそんなもんか」

そこに客が入店してくる。レジ台を拭いていたぞうきんをレジ裏のバケツに放り込み、姿勢を正す秋葉。

秋葉「いらっしやいませー」

御来屋も立ち上がって応対しようとする。が、客に見知った顔を見つける

御来屋「いらっしやいませー……」

客は、櫻見と沢村だった。しかも一瞬櫻見と目が合ってしまう。

あわててしゃがんで秋葉に話しかける御来屋。

御来屋「ちょっと俺在庫確認してぐるから対応よろしく」

そのままそそくさとバックヤードに行く御来屋。

秋葉「えー、なんだよいきなり…いらっしやいませ」

客二人がレジに来て話を始める。

櫻見「えーと、じゃあ沢村君は封筒だっけ」

沢村「おっ、じゃ紙みといて」

櫻見「オーケー」

沢村は秋葉に話しかける。

沢村「えーと、ちょっと特殊な封筒を作りたいんですが…印刷サービスとかやってるんですよね」

秋葉「あ、はい。とりあえずベースになる封筒がむこうにあるので、ご案内します」

沢村「すみません」

沢村と秋葉はレジを離れ店内の封筒ブースに向かう。

バックヤードのドアに貼りつき、聞いている御来屋。

一人残された櫻見はレジにあるベルと、バックヤードの出入り口とを交互に眺める。

いじわるな微笑みを浮かべ、櫻見はベルを鳴らす。

チーン、とベルの音が店内に響く。

びくつと、肩を揺らす御来屋。

櫻見はバックヤードを見つめ、ベルを鳴らす。

チーンと、再び店内にベルの音が響く。

あたふたと御来屋はドアの取っ手に手を付けようとするが、離すという行動を三度繰り返す。櫻見は楽しそうに笑みを浮かべつつ、ベルを連打する。

チーン、チーン、チーン、三度ベルを連打したところで、秋葉が気付き声を張り上げる。

秋葉「おーい、御来屋君！」

苦虫を噛み潰したような笑顔で、ため息をつきながらゆっくりとした足取りでレジに出ってくる御来屋。

櫻見の口角が上がる。

御来屋「…何でございましょつか」

櫻見「いや、紙が見たいんだけど。」

御来屋「紙ならあちらにございますか」

御来屋がレジの隣のブースを指差す。

櫻見「いや、でっかいやつ」

御来屋「…サイズはどれくらいですか？」

御来屋は笑顔を保ちながらも、口角をぴくぴく上げている。

櫻見「あれ、サイズか」

携帯を取り出してメールを確認する櫻見。

櫻見「A1とかA2とかでございんだけど、あるっ。画用紙みたいな紙の」

御来屋「…」カラムにございます、ご案内します。

笑顔を崩しそうになりながら櫻見を誘導する御来屋。

櫻見、携帯をそのままレジ台の上に置いて御来屋に付いていく。

× × ×

紙がいつぱい並んでいる「コーナーの前に来る二人。

御来屋「ここにがあるのが基本で、この中の紙でないサイズは在庫にある物があるので、

ご入用でしたらまずお尋ねください」

櫻見「そっ、ありがとっね」

やたら慇懃な態度の御来屋に、にやにや笑顔で答える櫻見。

レジに戻ろうとした御来屋に、声を掛ける櫻見。

櫻見「撮影は順調？ 御来屋くん」

御来屋、立ち止まって答える。

御来屋「いや、ぜんぜん撮れてませんよ」

櫻見「あめそっっ、こっちはすごい順調。監督の安部さんの人柄かしらねー？ すぐく現

場楽っつね」

御来屋「そうですか」

ろくに紙も見ず御来屋に嫌味を言い続ける櫻見。そちらを向けない御来屋。

櫻見「今回の買い物も、このあとの口ケの小道具なんだけど…御来屋君は暇そっね」

何も答えない御来屋。怒りで肩に力が入るが、御来屋は立ちつくす。

構わず続ける櫻見。

櫻見「昨日の撮影でもトラブルだったんですって？ 楠本さんから聞いたけど…相変わらずなのね」

御来屋「お客様！… 仕事中ですから」

その言いつつ帰ろうとする御来屋をひきとめる櫻見。

櫻見「これ貰うわ」

x x x

レジで会計している櫻見。

御来屋「1152円になります」

御来屋はレジ袋を下の棚から取り出す。

櫻見は財布を出す。

櫻見「あ、そのままでもいいわ。どうせすぐ近くだし」

御来屋「はう」

御来屋はレジ袋をしまっ。

櫻見「あと領収書ちょうだい。宛書は「荒川映像専門学校村山ゼミ」で」

御来屋「はう」

事務的な対応に徹する御来屋。

手書きの領収書を取り出し、宛書を書き始める御来屋。

それをちよつと優しそうな目で見ながら、先ほどの話題を続けようとする櫻見。

櫻見「…あのおさ、私も嫌がらせて言ってるわけじゃないの」

手が一瞬止まる御来屋。

櫻見「ただ、正直御来屋君て人付き合い苦手でしょ。だから、同級生として見捨てられないくて…なんていつかな、御来屋君は幼いんだよ」

領収書を書き終え、判子を押すため朱肉を取り出す御来屋。

櫻見「自分じゃ判ってないだろうけど…映画撮るだけが才能じゃないんだよ」

ついにプチ切れる御来屋！ ドンと机を叩く。

御来屋「うるさい、お前に何が判るっ！」

その衝撃で、机の端に置いてあった櫻見の携帯電話が下に落下してしまっ。

櫻見「あ」

櫻見は携帯に手を伸ばすが、そのまま下にあった、

ぞうきんの入ったバケツに落ちる。

携帯はバケツの中に沈んでいく。

驚いた表情でそれを見つめる櫻見と御来屋。

沢村「おい、御来屋どうした」

沢村と秋葉は走ってレジの前にはやってくる。

## 20〇専門学校・廊下

人通りのない廊下のゴミ箱の前で立ち尽くす御来屋。  
下を向いているため、表情は見えない。

御来屋は右手には自分の台本を持っている。

台本はずっと握りしめられているからか、温ってくしゃくしゃになっている。

御来屋は右手を挙げて台本を捨てようとするが、手が止まってしまふ。

関口が曲がり角から歩いて出てくる。

関口は御来屋…というよりカメラに向かって驚き、しばらくためらってから御来屋  
に向かって歩いてくる。

それには気付いていない御来屋。

関口は色の付いた表紙の台本を手を持っている。

関口「ああもう、くしゃくしゃにして…せっかく拾ったのに」

関口は御来屋を覗き込みながら問う。

御来屋「あ、関口さん」

御来屋は顔を上げて関口を見る。

御来屋「…いや、八つ当たりですよ、八つ当たり、すみません」

関口「なんかあったんですか？」

御来屋「あー、いや、映画のこととか、それ以外でもなんか失敗続きで、もう映画作るの  
辛くなって」

御来屋は苦笑する。

関口は御来屋の右手に持っている台本を見て、御来屋を見る。

関口「でも、台本捨てられないんですか？」

御来屋「あ、ははは。でもなんでか、それでも続けたくって」

御来屋は右手に持っている台本を見ながら言う。

関口「いっそ、貴方は」

大げさにため息をついて。

関口「…映画撮るの、やめたほうがいいんじゃないんですか」

御来屋「えっ！」

御来屋は関口を見る。

関口は自分の台本を手でもてあそびながら、御来屋を睨みつけて言う。

関口「あなたは自分が出るからって、他人を見下している…。人を「アレ」呼ばわりな  
んですって？」

関口は気持ち悪いものを見るような目で御来屋を睨む。

御来屋「俺はそんなつもりじゃない」

御来屋は関口を睨み返す。

関口「自分基準に他人を見下して、人望が得られるとでも？」

関口は目を細め、自分の台本をパラパラとめくる。

御来屋「え…」

関口「どれだけ自分が出るからって、独断で監督の指示に従わないで勝手にカメラワークを決めて、拳句の果てに他人が借りたカメラを落とす、自分のせいじゃないと言いたい張る」

御来屋は上の方を見つめる。

御来屋「なんでそのことを？」

関口は笑いながら、ボタンと台本を閉じる。

関口「これだけを聞いたら…大半の人があなたのことをどう思うかは…判りますよね」

御来屋「だから、俺はそんなつもりで…」

御来屋は俯いてしまう。

関口はふっ、と鼻で笑う。

関口「じゃあ、どんなつもりだったんですか？」

御来屋「っ——」

御来屋が唇を右手の親指でようとして、台本があることに気づき、その手を下す。

関口「仮に貴方が優れていても…他の人があなたみたいにも何でもできる人間じゃないんですよ」

関口はそついうとカメラ側へ去っていく。

去り際に一言添えていく。

関口「もうそれならいっそ、私に監督やらせてください」

完全に見えない場所まで去っていく関口。

御来屋は無理矢理唇を右手の親指でなでる。

廊下には御来屋以外は誰もいなくなる。

御来屋はぐしゃぐしゃに丸まった台本を広げ、両手でバサッと撫でつけて広げる。

御来屋「俺は……」

## 21〇御来屋の部屋 (2)

ベッドに座っている御来屋。

ほっぽり出してあった専門のパンフを拾い上げて見る。

見開き、自分の写真についている題字は、「困難があっても、夢を諦めない」。

パンフを閉じ、天上を見上げる御来屋。

## 22〇石渡・撮影現場 (D)

石渡の撮影現場に来ている御来屋。

御来屋はカメラをやっている。

キャストAが自販機でジュースを買っふりをする。

石渡は頷く。

石渡「おっけー。じゃ、次本番行きます、買っちゃって良いよ」

キャストA「はー」

スタッフA「あ、ちょっと待って」

スタッフAが自分の荷物から櫛を取り出し、キャストAの髪の毛を直し始める。

それを見て、ちょっと気まずそうに石渡に話しかける御来屋。

御来屋「あのさ、こないだはごめん」

石渡、ちょっと意外そうな顔をして。

石渡「え、まあ、あれは良いって。別になんとも無かったんだしさ」

御来屋「…そんでき、厚かましいお願いではあるんだけど…石渡さん、俺の作品のカメラ

やって貰えないかな」

石渡「え？ なに、數から棒になに、別にスケジュールが合えばだけど大丈夫だけど」

御来屋「ほんとに!？」

石渡「うん、御来屋君が手伝ってくれたおかげで、こっちは巻きで来てるからね。余裕あ

るよ」

スタッフA「OKですー」

石渡「はい、じゃあ行こう!」

カメラに向かう御来屋。

## 23〇御来屋の撮影現場・屋上 (D)

台本の表紙に「石渡」と書く手。

石渡「台本当日渡して、御来屋君らしくないね」

御来屋「ごめんごめん、適当だったって自覚はある。役者さんにはもうちょっと前から渡

してあるんだけどさ」

石渡「大丈夫なの？ それで」

御来屋「一応、カット割りとか全部頭の中に入ってるから」

石渡「へえ」

屋上に照明が設置され、ロケできる状態になっている。

石渡「ほんっとスタッフ少ないね」

御来屋「役者は外の専攻から何とか集まったんだけど、スタッフ居なくてやばかった。石

渡さんがやってくれてほんと助かるよ」

石渡「じゃあ、そろそろやるつかー！」  
御来屋「はい、じゃあ役者さんスタンドインお願いしますー！」

× × ×

御来屋の卒業制作。

女 「ねえ、私の存在って何だろ」

男 「そりやお前以外の何者でもないだろ」

女 「そうじゃなくてさ…いや、そうなんだろうけど。私は、私自身の存在を、どう証明すれば良いんだろうって思ってる」

男 「お前には名前があるだろ？ その名前が単語としていま此の世に存在してるって

ことは、つまりお前は存在してるんだよ」

緩い沈黙。

× × ×

御来屋「はいカット！ とりあえず前半撮りきったので、一五分休憩します」

全員「はい」

休憩になったので、それぞれ現場にいる人は思い思いの位置で休憩する。

何人かはジュースを買いに下に降りていく。

日陰に移動してスポーツドリンクを飲む御来屋。

側に来て話しかける石渡。

石渡「やたら難しい話だよなー、これ」

御来屋「フストってこともあって、挑戦的な内容をやってみたくってさ」

石渡「そかそか…このあとの日程どうなってるの？」

御来屋「正直カツカツでさ、しかもその上ロケ地のメドが立ってないという状況」

石渡「あー、ファミレスのシーンとかあるしね」

御来屋「うちの学校に食堂的な物があれば誤魔化せたのになあ」

石渡「まあ、このあとの日程が決まったら早めに連絡してよ」

御来屋「判ってる」

アクエリを飲み干し、立ち上がる御来屋。

24〇文具屋

レジに座り、鼻歌を歌いながら値段貼りをしている御来屋。

秋葉は片づけを始めている。

秋葉「やたらお前ご機嫌だな」

御来屋「今日やっと最初のシーンが撮れてさ、カメラマンもなんとか拾えだし」  
御来屋は手元を見ず、手際良く値段貼りをしていく。  
秋葉「良かったじゃん」

御来屋「ま、問題全部クリアってわけじゃないんだけどね」  
値札の貼られた商品がいくつも積んであり、横にあった伝票にろくに確認もせず認め印を付く御来屋。

(この後発覚するのだが、この事務処理は間違っている)

## 25○御来屋の部屋

机の上で絵コンテを書いている御来屋。

御来屋は鼻歌を歌っている。

手元にはスケジュール帳と台本が置いてある。

スケジュール帳には9、16日に撮影の文字。

9日には○がついている。(終わったというマーク)

12日の欄には『中間発表』と書かれている。

## 26○専門学校・機材室近くの廊下

教室に向う御来屋の足取りは軽い。

櫻見が石渡を連れて機材室に入ろうとする。

御来屋は石渡に気づく。

御来屋「あ、石渡さんおはよう」

石渡はちらつと、櫻見を見るが、すぐ振り返る。

石渡「あ、お、おはよう」

石渡は多少どもり気味に返し、またすぐ視線を逸らす。

首を傾げつつ、櫻見と石渡の横を通りすぎる御来屋。

## 27○専門学校・教室

□の字型に机が置いてあり、机のない方にはスクリーンが置いてある。

村山を真ん中として座っていて、御来屋は村山の右の近くに座っている。

櫻見は石渡、楠本、沢村と共にスクリーンに近い方に座っている。

部屋は全体的に薄暗い。

スクリーンには安部の作品の予告編が流れている。

その内容は、あまり面白そうな物ではない。

御来屋は欠伸をする。

最後には『近日公開』と監督名、主演の名前が映っている。

黒みになると、誰かが明りを付けるカチツとした音が聞こえ、部屋が明るくなる。

安部が立ち上がる。

安部「えっと、ご覧いただいた通り、私の撮影は順調です。あと、6シーン未撮影ですが、スケジュール通りに行けば、後一週間もかからないと思います」

村山「そっか…どつだ、撮影は楽しいか？」

戸惑う安部。

安部「え、まあ、はい」

しばらく安部の顔をじっと見つめる村山。

村山「…うん、このまま順調に進めて行ってくればいいわ」

村山はこここじながら言う。

安部はほっ、と安堵のため息が漏れている。

安部「ありがとうございます」

安部は会釈し座る。

御来屋は眠そうに目を擦る。

櫻見はそんな御来屋を見て、楠本とこそこそ耳打ちをしている。

村山「じゃあ、最後は御来屋のを見ようか。電気消して」

村山の一言でまた部屋が薄暗くなる。

御来屋は姿勢を正す。

村山が御来屋の動画を流し始める。

#20 (劇中では昨日) で撮った部分が流れ始める。(石渡たちとは違い、画面が綺麗)

最後には手伝ってくれた石渡とキャストの名前。

黒みになると、誰かが明りを付けるカチツとした音が聞こえ、部屋が明るくなる。

御来屋が立ち上がる。

御来屋「ご覧頂いた通り、撮影はまだ始まったばかりで、日程的にはギリギリです。ですが、これからピッチを上げて頑張ってください」

村山「うん、絵は綺麗だし編集もいい、撮ったのは石渡か」

石渡、仏頂面で頷く。

村山「撮影にミスが無いから、演出も生きてるよ」

御来屋「ありがとうございます」

村山「まあ、このまま頑張ればいい作品が出来るだろう、頑張ってくれ」

御来屋「はー」

櫻見は何か思案している顔でその様子を見ている。

村山「では、今日はこれで解散、みんな頑張れよ」  
生徒「はい！」

生徒が各々に動き始める。

御来屋は鞆に荷物を入れて教室から出ようとする。

村山「あ、御来屋！ちょっと来てくれ！」

御来屋「え、あ、はい！」

村山に手招きされ、肯く御来屋。

櫻見が石渡に何かを話しかけている。

28〇文具屋・休憩室

御来屋と秋葉が着替えている。

秋葉「テレビ出演？」

秋葉が御来屋の方を向き、叫ぶ。

御来屋「これなんだけどさ、明後日の10時から。で、やる作品の本編が「レレね」

テレビの番宣チラシと、こないだの作品のDVDを秋葉に見せる。

受け取って眺める秋葉。

御来屋「こないだのグループ作品がなんか評価良かったみたいでさ、監督にインタビュー

したいってさ」

御来屋はエプロンをたたみながら言う。

秋葉はエプロンを脱ぐ手が止まっている。

秋葉「すごいなー！お前の将来決まったようなもんじゃん！」

御来屋「秋葉くん、大げさだよ…」

秋葉「んじゃ、これ見せて貰っわ」

御来屋は笑いながら答える。

秋葉はチラシを御来屋に返して、DVDは自分のカバンにしまって、エプロンをたたむ。

御来屋は受け取ったチラシをカバンにしまいながら笑う。

秋葉「でも、これで将来は映画監督だな」

秋葉はにこにここと自分の事のように喜ぶ。

御来屋「ありがとっ」

御来屋は頭をかく。

御来屋はロッカーから鞆をだす。

秋葉「あ、お前、今日忙しっ？」

御来屋が鞆を取り出したのを見て、秋葉は言う。

御来屋「うんざ」

御来屋は首を横に振る。

秋葉「テレビ出演祝いに一緒に飯食いにいかない？あ、もちろん俺の奢りで！」

御来屋「え、あ、行くー！」

秋葉「お、じゃあ、ちよつとまっててー！」

秋葉はその御来屋の返事を聞くと急いでエプロンを畳んでいく。

御来屋「あ、でも奢んなくていいからな」

秋葉「あ、お前中華平気？」

秋葉は忙しなく手を動かしている。

御来屋「話聞いている？」

## 29〇中華料理屋

個人経営であろう、こじんまりした中華料理店。

ちらほら人がいる。

入り口わきの席で御来屋と秋葉が座っている。

テーブルでラーメンを食べる御来屋とチャーハンを食べる秋葉。

秋葉「ふうん、卒業制作は大変なんだ」

チャーハンを食べながら、肯く秋葉。

御来屋「ああ、なんだかんだで目の敵にされた人にスタッフもキャストも取られるし、本

当進まなくてさ」

御来屋はため息をつく。

秋葉「なんでそんなに目の敵にされてんの、その桜井さんに」

秋葉は食べるのを一度やめ、テーブル肘をつく。

御来屋「櫻見さんね、いや、なんか今まで俺が自意識過剰で人を見下していたからだとは

思っただけど、ぶっちゃけそこまでするかな…」

御来屋はラーメンをすする。

秋葉「お前は何でも出来ちゃうタイプだからなあ、確かに映画みたいに、大人数で作る中

じゃ嫉妬されそう」

秋葉はスプーンでチャーハンをつつきながら言う。

御来屋「そうなのかな？」

秋葉「まあ、嫉妬されるくらいお前がすごいってことでしょー！」

秋葉が顔を上げ、御来屋ににこりと笑う。

御来屋「秋葉くんはポジティブだな」

御来屋は秋葉の言葉に苦笑する。

秋葉「そうじゃなきゃ、やってらんないっしょー！」

御来屋「そうだな」

秋葉「そつそつ」

秋葉は終始にこやか。

御来屋「あー、後は口ケ地の問題だな」

御来屋は箸を置き、後ろに大きく伸びをする。

秋葉はチャーハンを食べるのを再開する。

秋葉「口ケ地？」

秋葉はチャーハンを飲み込んで問う。

御来屋「ああ、次の撮影場所がさ、飲食店なんだけどさ、チェーン店は絶対オーケーして

くれないから困ってるんだよ」

秋葉「ふーん」

秋葉は相槌をうちながらチャーハンを食べようととして、止まる。

秋葉「ここは？」

御来屋「はい？」

御来屋は怪訝そつな目で秋葉を見る。

秋葉「だから、この店ーチェーン店じゃないしー」

秋葉は興奮気味に早口で喋る。

御来屋「ああ、別に飲食店なら問題ないけど、そんなに簡単に…って、秋葉くん？」

秋葉が立ち上がりカウンターの方へ向う。

御来屋は何事かと、慌てる。

秋葉「すいませーん！店長さんいますか？」

秋葉は厨房に向って叫ぶ。

何人かいるお客さんが振り返る。

御来屋「秋葉くん。俺の話聞いてる？」

御来屋がため息をつきながら言う。

秋葉「うん、聞いてる、聞いてる」

御来屋の問いに対して秋葉は生返事で答える。

厨房の奥から西山高志(41)が出てくる。

西山「何でしょつか？」

秋葉「あ、すみません、このお店で映画を撮りたいんですけど」

西山「え、映画？」

西山は言いなれない言葉を言うように口を動かす。

御来屋「あ、あの突然すみません、あの、私、荒川映像専門学校の映画専攻の者なんです

が…」

西山「ああ、あそこの生徒さんね！」

ポンと手を打つ西川。

西山「へえ、それで、うちの店？」

御来屋「あ、あの、はい。その、飲食店で撮影がしたくって、出来る場所を探してるんです」

西山「いや、もう全然いいよ！ 学生で映画か、良いねえ！」

二つ返事で了承する西川。

御来屋と秋葉、驚いて顔を見合わせる。

西山「いや、じつはおっさんも、若い頃は映画撮ろつって、8mmとか持って街をうろついてたもんだよ」

御来屋「あ、そつなんですか」

相づちをうつ二人に気をよくして、話を続ける西川。

西山「いやー、君たちはもうフィルムとか使わないのかな？ おっさんはあれだよ、昔近

所の若いのと一緒に映画撮ろつって騒いだもんだよ」

御来屋「いや、はあ…」

顔を見合わせる御来屋と秋葉。

西山「最近は何い子も頑張ってるんだねえ。ね、カメラ何で撮るの？」

御来屋「いや、HDVかなあ…」

西山「HDV？ それってフィルムサイズいくつ？」

御来屋「えと、フィルムじゃなくてデジタルです、ハイビジョンの」

西山「へえー…良くわかんないけどすごいんだねえ」

そこで奥の方の席から呼ばれる。

客 (off) 「注文いいますかー！」

西山、それに気付く。

西山「はい、今行きます！ いやあ、ともかく、撮影で使うくらいなら大歓迎だよ。後

で日程教えてな。なんならおっさんが出てやっても良いぞ」

西山はそう言っって豪快に笑う。

御来屋「ほ、本当ですか！？」

秋葉「良かったじゃん！」

西山「じゃあ、詳しくは後で連絡してー！」

それだけ言い切ると、先ほど呼ばれた客の方へ向かう西山。

その後ろ姿にお礼を言っ御来屋。

御来屋「ありがとっございませー！」

秋葉「な、頼んでみるもんだろ」

## 30〇御来屋の部屋

机にパソコンと書き込み済みのコンテ用紙が置いてある。  
パソコンにはシナリオが映っている。

御来屋はシナリオの柱の部分の『ファミレス』を『中華料理屋』に直し、手元のコンテ用紙の内容を書き換えている。

白紙のコンテ用紙を取ろうとして、はらりと番宣チラシが舞い落ちる。

御来屋「あ」

チラシを拾い上げる御来屋。

御来屋「…放送明日じゃな」

その時突然、携帯から着信音が流れてくる。  
少し長い沈黙。

## 31〇専門学校・校門前

御来屋が走って行く。

急いでいるのか、顔には汗が浮かんでいる。

関口と櫻見が反対方向から歩いてくる。

御来屋は関口たちには気づかず、関口の横を通り過ぎる。

関口と櫻見は御来屋が走り去って行く御来屋を見つめる。

櫻見、にやりとほほえむ。

## 32〇専門学校・機材室 (D)

ガシャン！と大きな音を立てて、御来屋の機材貸し出しカードに×印が押される。  
御来屋「どういふことですかー」

御来屋が叫ぶように言う。

村山「どうもどうもな」

村山がそっぽを向いたまま、低い声で言う。

御来屋「理由はなんなんですか！俺は何もした覚えがありません」

御来屋はまた声を張り上げる。

村山がちらつと、御来屋を見る。

村山「石渡の撮影でカメラを落としたのは、お前だったそうじゃないか」

御来屋「え、えー？」

村山「聞いたぞ、それをお前、石渡のせいにして報告したな」

御来屋は目を見開く。

村山「その上、櫻見に嫌がらせをし、安部班の撮影を妨害したとも聞いている」

御来屋「そ、それも、まったくの嘘です！ むしろ俺が櫻見さんに…」  
村山が御来屋を睨みつける。

村山「櫻見の携帯を壊したそうじゃないか！？ それはどうなんだ」

御来屋「そ、それも会話の流れ上仕方なかったんです、櫻見さんが全部原因で」

ドンと机を叩く村山。

本気で苛立っている村山に少しおびえる御来屋。

村山「どうなんだ！？ 壊したんだろ？」

黙るしかない御来屋。

村山「言い訳はいい。お前が自覚していないって言うのも問題の一つだ」

御来屋は唇を右手の親指でなでる。

村山「他にもいろいろ櫻見から聞いたよ。お前撮影現場でずいぶん猿山の大将やってるら

しいじゃないか」

姿勢を変える村山。

村山「人のことをこき使ったり、自分勝手な言動を取ったり…映画に対して熱心なのは認める。が、学校内のグループ制作でそれじゃ困るんだよ」

御来屋「…俺はそんな…」

村山「とにかく御来屋、お前に機材は貸せなご」

村山はまたそっぽを向き、手を前後に揺らせ、出ていけと御来屋向ってやる。

御来屋は少し立ったまま動かない。

村山「出てけ」

村山がはつきりとした口調で言う。

御来屋と秋葉は頭を下げる。

御来屋「失礼しました」

御来屋はドアを開き、振りかっってお辞儀をする。

御来屋がドアを閉める。

### 33〇専門学校・入り口 (D)

ため息をつきながら、若干うつ向き気味で歩く御来屋。

目の前から櫻見と楠本が来ている。

櫻見たちはカメラ、マイクブーム、照明などを持っている。

櫻見が御来屋に気づき、御来屋に駆け寄る。

櫻見「御来屋くん、どうしたの？ 下なんて向いて」

櫻見がにこやかに笑いながら言う。

御来屋「櫻見さん……」

御来屋が、顔を上げる。

御来屋は嫌そうな顔をする。

櫻見はくすくすと笑い、言う。

櫻見「私たちこれから撮影でさ……、あ、そう言えば27日だけ、御来屋の撮影予定日」

櫻見の口角が上がる。

御来屋は眉をひそめる。

御来屋「……そうですけど」

櫻見「その日、石渡さんのスケジュールうちのグループが押さえさせて貰ったから」

御来屋「えー!? いや、その日は俺が石渡さんを使う……」

櫻見「ねえ」

御来屋の言葉を少し大きめの声で遮る櫻見。

櫻見「今、俺が石渡さんを使うって言いたかったんでしょ?」

櫻見は真顔になる。

櫻見「いつだって人を物扱いするのね」

御来屋「そんなの、言いがかりだ!」

第一、前からその日は石渡さんに頼んでおいたし……」

御来屋は口調がどんどん荒くなる。

櫻見「でも、機材使用停止になっちゃったんでしょ?」

御来屋「なっ」

櫻見「知ってるわよ、撮影できなくなったんなら、カメラマンも必要無いわよね」

櫻見はにこやかに笑う、がよく見ると口元だけしか笑っていない。

御来屋は口をつむぐ。

沈黙が流れる。

櫻見「御来屋くんはさ、誰のために映画を撮ってるの?」

御来屋は何も言わない。

御来屋は唇を右手の親指でなでる。

櫻見はそれを鼻で笑う。

櫻見「あなたはいつだって、自分のために映画を撮ってる。良かったわね、あなた一人は

さぞかし楽しいでしょ?」

楠本「さっちゃん、まだいかないの?」

櫻見「あ、ごめん、今行く!」

楠本に呼ばれ、機材を背負い直す櫻見。それに問いかける御来屋。

御来屋「じゃあ、あんたは誰のために撮ってんだよ……?」

櫻見「……すぐ身の回りの人のことも考えられないほど幼いくせに、よくシナリオ書けるわ

ね」

櫻見はそう言って自分の班に戻って行く。

34〇文具屋 (N)

御来屋が休憩室に入ると、いきなり津川に呼ばれる。

御来屋「こんばんはー」

津川「みー君」

御来屋「つわ、どうかしたんですか？」

津川「どうしたもないよ！ 君がこの間貼った値札がぜんぜん違うんだよ！」

御来屋「え？」

津川「どうもおかしいと思ってただけだ…これ君がこないだ処理した伝票でしょ、これ

違う商品のだよー」

御来屋「そんな……」

御来屋が後ろに一歩下がるが、ドアに足をぶつける。

津川「仕方ない、今から全部貼り直すよ」

× × ×

時計の音が少し聞こえる。

休憩室には誰もいない。

御来屋の右側には間違って貼ってしまった値札がついたままのペン。

左側に剥がし終わったペンが置かれている。

まだ右側のペンが多い。

御来屋は不慣れな感じで値札を剥がしていく。

ふと、御来屋が作業をやめ、掛け時計を見ると22時を丁度過ぎるところ。

御来屋は時計を見てため息をつき、作業を再開する。

時計の音が大きく聞こえてくる。

そこに津川が残りの商品をかかえて入ってくる。

津川「これで全部だ…既にいくつかは売れちゃってるけどね」

御来屋「…本当にすみません」

津川「本来なら注意じゃすまない所だろうが…まあ、差額も100円くらいだったし、今回

は許すよ」

手元のペンを拾い上げる津川。

2本のペン（ほとんど同じ見た目）を見比べながら言う。

津川「これで値段が違うというのも紛らわしかったしな」

返事をしない御来屋。黙々と仕事をこなす。

津川「…そっだ、君…」

話しかけるも、落ち込んでる雰囲気。御来屋に話を振るのもなんだろうと思う。

津川「まあ、後で良いか。じゃあな、それ終わらしたら上がってくれていいよ」

部屋を出て行く津川。  
また時計の音だけになる。  
突然ノイズ。

## 35〇御来屋の部屋 (2)

御来屋が部屋に入ってくると、鞆と携帯をベッドの下に放り投げる。  
上着を脱ぎ、ベッドに乱暴に身を投げる御来屋。  
御来屋は唇を右手の親指でなで、舌打ちをうつ。  
御来屋の横にあった携帯のバイブが鳴る。  
専門学校からの電話であることを確認し、電話には出ず携帯のない方へ寝がえりをうつ。

御来屋「ちっ」

御来屋はさつきより大きな舌打ちをし、立ち上がる。  
机の前に来て、上にあつた絵コンテを見る。

御来屋「めんげんせえー」

御来屋は絵コンテを掴み取り、びりっと、音をたてて縦に破る、破る、破る。  
少しの間部屋には時計の音と紙の破る音しかない。  
絵コンテがびりびりに破かれた状態で床に散らばっている。  
ある程度大雑把に破き終わった後、御来屋は無言でベッドの近くにあつた鞆を開ける。

御来屋「あ……」

鞆には台本と企画書、そして専門学校のパンフレットが入っている。  
御来屋はパンフレットを広げ、付箋の貼つてあるページを開く。  
そして、自分の顔とキャッチコピーを中心に破く。

御来屋「ぼっかじゃねーのー」

御来屋は鼻で笑い、パンフレットを壁に投げつける。  
鞆に入っていた企画書も破つては投げけることを繰り返す。  
一通りまき散らして、肩で息をする御来屋。

御来屋「ほんと、馬鹿みたいだ」

自分の作品の台本を、トンとゴミ箱に捨てる(破いたりほしくない)。  
そのまま静かに御来屋は体育座りをして、膝に顔を埋める。  
時計の音だけが響く。  
また突然携帯が鳴る。  
先ほどと少し違うバイブ音。  
沈黙、バイブ音だけが鳴り響く。  
今度は文具屋からの電話である。携帯に手を延ばす御来屋。

## 36〇御来屋の部屋 (D)

昨夜破った紙がそのまま床に散らばっている。

御来屋はベットの上で体育座りをしている。

ふと携帯を開く御来屋。

携帯には14時半と書かれている。

御来屋「……バイト」

御来屋が立ち上がるのと、床に足を置くと、紙がさつ、という音がする。

御来屋はそれに気にせず、に歩いて行く。

無意識に鞆を拾う動作をするが、ベットの近くに鞆はない。

鞆は壁側にある。一瞬目がそちらを追うが、結局鞆は拾わない。

御来屋は上着を着て、携帯を上着のポケットに入れ、鞆から財布だけを取り出しそれ

れも財布の中に入れる。

紙特有の音をたてながら、ドアに歩いて行く御来屋。

御来屋はドアに手をかけた状態で部屋を振りかえる。

御来屋はため息をついて部屋を出ていく。

## 37〇道路・押しボタン式交差点 (D)

御来屋が歩いている。

目の前の信号が青で点滅しているのを見て走り出す御来屋。

だが、間に合わず、信号が赤に変わる。

御来屋「はぁ……」

御来屋は大きなため息をつく。

関口「そんなおつきなため息ついてどうしたんですか?」

関口がいきなり御来屋の横に現われる。

御来屋「つわっー」

御来屋は驚いたのか、関口から2、3歩後ずさりする。

関口はそれを見て笑う。

関口「点滅したら諦めましょうよ。いろいろ諦めが肝心です」

御来屋「見ていたんですか」

御来屋は疲れを隠そうとせず、息を整えながら言う。

関口「ええ、あまりに必死そうだったから、いつ話しかけようか悩んじやいました」

関口は自分のスケジュール表を取り出し、言う。

そのスケジュール帳を取り出すときに、ほんつとにさりげなく台本を取り落とす。

関口「にしても、今日は中間発表ですよね」

御来屋「何で知ってるんですか?」

関口「私、櫻見さんと友達なんで、聞いたんです」  
御来屋「櫻見……」

御来屋は唇を右手の親指でなでる。

関口「学校はあつちですよ……さほりですか？」

関口は右の方を指差す。

御来屋「行っても俺には無意味なものですから」

関口は空を見上げる。

関口「そつですか。まあ、映画監督なんて学生時代からやるもんじゃないんですよ。それでも良い」

その関口の発言に違和感を覚える御来屋。

しばらくの沈黙の後、関口に訪ねる。

御来屋「……あなた、何者なんですか」

関口は顔を御来屋の方に顔を向けて言う。

関口「ただの音響ですよ」

「こり、と笑う関口。

関口「私は」

関口は小さく聞こえるか聞こえないかの声で呟く。

御来屋は関口の呟きに気づいていない。

関口「……押しボタンですよ」

関口の言い方に肩間にシワを寄せつつ、連打する御来屋。

38〇文具屋・休憩室 (D)

休憩所に入ってくる御来屋。

御来屋「おはよう、いむらまふ」

御来屋は低めのテンションで言う。

津川「やあ。急に呼んでもうすまないね。この時間専門あるんだろ？」

御来屋「いえ、昨日のこともありますし、何か出来ることなら」

津川「じゃあ着替えてすべにレジに出といて貰えるかな」

御来屋「はー」

着替えを始める御来屋。

津川、出て行くうしろとしてとどまり、御来屋に話しかける。

津川「ああ、後で今月分の給料渡すから、覚えといてね」

御来屋「はい。あ、でも判子無いんです」

津川「拇印でございませ」

御来屋「はー」

改まって、咳払いをする津川。

津川「あのさ、みー君、就職先はまだ決まっていんだよね」

エプロンを着ている御来屋の動きが止まる。

津川「だったらさ、うちで働いてみないか」

御来屋「え、どういふことですか」

津川「社員として、うちに入らないか。みー君、うちにいるバイトの中でも一番働きが良

いよ

御来屋「……」

津川「社員になれば、給料だって値上げできるし、福利厚生だって…一応文具屋業界にも

あるからな。どうだろっ」

御来屋「…少し、考えてみます」

津川「よろしく頼むよ」

津川、休憩室を去る。

御来屋もしばらく立ち尽くして、それから休憩室を出て行く。

39〇文具屋裏口(夕)

御来屋が裏口から出てくる。

秋葉が裏口に向かって歩いてくる。

秋葉「よっ、未来の映画監督ー」

秋葉は御来屋に向かって手を振り駆け寄ってくる。

御来屋「ああ、秋葉くんおはよう」

御来屋も手を挙げ答える。

秋葉「もっこんばんはだろ。で、観たぜーテレビー」

秋葉は御来屋の肩をバンバンと2回ほど叩き言う。

秋葉「かっこよかったぜ、めっちゃ語ってたな！」

御来屋は唇を右手の親指でなでる。

御来屋「よせよ、その話は」

御来屋は下を向いて言う。

御来屋「つか、正直俺、映画撮るのやめよかって考えててさ」

秋葉「え？ なんだよいきなり」

御来屋「俺今、学校でトラブっちゃって卒業制作止められて…、てか、もう映画とかやめ

て俺ここに就職しようと思ってる」

御来屋の顔は上がらない。

秋葉は眉をひそめる。

秋葉「就職…？」

御来屋「ああ…店長から、良いなら採ってあげるよって言われた」  
秋葉「そりゃ凄えけど…でも、なんでだよ、もったいねーじゃん！ 自分の好きな事を仕事に出来んだろっ！」

御来屋「だけど…」

秋葉「昨日のテレビ見て、俺すごいなって思ったんだ、俺の身近にこんな頑張っているやつがいてさ。俺には…出来ないことだから」

御来屋は顔を上げられないまま、秋葉の台詞を聞いている。

秋葉「そんで、DVDも見たぜ。…面白かった」

御来屋ははっと顔を上げる。

秋葉「ほんと、お世辞じゃなくて、面白かった。ありゃたしかにテレビに出られるわ」

秋葉は顔を上げた御来屋に笑顔を向ける。

津川「秋葉くんきてないのー？」

津川の声が休憩所のほうから聞こえてくる。

秋葉「あ、はい！秋葉います！今行きますー！」

秋葉はその津川の声に叫び返す。

秋葉「俺は楽しみにしてるぜ、次回作。またDVD貸してくれよ」

秋葉はDVDを御来屋に投げつけるように無理矢理渡す。

それを受け取り、目を細める御来屋。

秋葉が裏口に入っていく、裏口のドアが閉まる。

それを見ている御来屋。

#### 40〇道路 (N)

御来屋が道路を歩いている。

歩きながら少しずつ、口角が上がってくる。

そこからだんだんと笑いに変わっていく。

御来屋「あははははははは」

御来屋の笑い声はだんだん大きくなり、御来屋は空を見上げる。

笑いながら、頬には涙がたつたっている。

御来屋は服の袖で思いつきり目をさすり、前を見る。

御来屋の目の前の信号（関口と話したところ）は赤になっている。

御来屋は立ち止まり、もう一度涙を拭う。

御来屋「あーあ、いるじゃん、観てくれる人」

御来屋の目にもう涙はない。

信号が独りでに青になる。御来屋が歩き出す。

ふと、御来屋、足下に台本が落ちているのに気付く。

御来屋「あ、関口さんの…」

## 41○専門学校機材室前

村山は機材室内で、パソコンを弄っている。

御来屋は入口の前に立っている。

御来屋「お願いします、機材を貸してください」

御来屋は頭を下げている。

村山「だめだ」

御来屋「お願いします、俺は作品を作りきりたいんです」

村山は一瞬御来屋に目を向ける。

御来屋は下げている頭を上げると、村山と一瞬目が合う。

御来屋「……失礼しました」

御来屋は一礼すると機材室から出ていく。

## 42○専門学校・廊下 (N)

人通りのない廊下のゴミ箱の前で立っている御来屋。

下を向いているため、表情は見えない。

御来屋は右手に持っている自分の機材貸出カードをぐちゃ、と丸める。

御来屋は右手を挙げて機材カードを捨てる。

関口「どうしたんですか？」

関口が後ろから覗き込むようにして言う。

御来屋は関口の姿をちらっと確認すると、特に驚いた様子もせずに振り向く。

御来屋「なんかデジャブを感じる」

御来屋はおどけた口調で言う。

関口「というか、また学校に来て何してるんですか。機材ダメだったんでしょ？」

関口はため息をつく。

御来屋「だけど、それでも俺は作品を作りきる。そう決めたんです」

御来屋は関口を見つめる。

しかし、関口は御来屋への説得を続行する。

関口「…そんなこと言ったって、機材がないとだめじゃないですか」

御来屋「まあ、そうなんですけど……」

御来屋は唇を右手の親指でなでる。

関口「もう、諦めちゃえばいいじゃないですか、他で機材を借りるお金とか、馬鹿になり

ませぬ」

御来屋「そんなことは判ってます」

関口の言葉に肯きつつも、御来屋は唸る。

関口は唸る御来屋にため息をつく。

関口「もう撮影は明日なんでしょ？ 無理ですよ。間に合いませんよ」  
御来屋「なんとか、なんとかしてカメラだけでも調達できれば…」

御来屋はそう言いかけて、やめる。

関口「御来屋さん？」

関口が心配そうな声で言う。

御来屋「ダメもとで頼んでみるか」

御来屋が呟くように言う。

関口「え？ 誰に…？ もう誰も残ってないですよ…」

御来屋は走り出す。

関口「御来屋さん？」

関口が慌てたように叫ぶ。

御来屋は腕時計をちらちらと見る。

時計は18時を過ぎていく。

御来屋が走っている先には『編集室』とか書かれた教室。

#### 43〇編集室 (N)

沢村がパソコンの前に座っている。

御来屋は沢村の横に座っている。

沢村「え、良いけど…ってほんとにダメなんだろうけどさ」

御来屋「えっ…、てか、大丈夫なの？ 櫻見さんのほうの撮影は」

沢村「いや、なんか石渡さんが入ったら人数足りちゃってさ、俺暇になっちゃったんだ

よ」

沢村はパソコンを弄るのをやめて言う。

沢村「つか、お前なんか人数足りてないらしいじゃん、俺当分暇だからカメラならやる

よ…」

御来屋「ほんとに？」

沢村「いや、俺は自分の経験を詰めるんならいくらでも手伝うよ。櫻見のほうはもう終わ

りつつあるし、基本暇だからさ」

御来屋「まじ助かるわー」

沢村「そんなじゃないって。で、機材はカメラと基本セットだけ借りてくればいいな…」

御来屋「ほんとに悪い」

沢村「別に気にするなって。映画撮れない辛さは判るしね。じゃ、適当に櫻見の撮影だっ

つって借りるから、明日の朝からだよね…」

御来屋「ああ」

安堵の表情を見せる御来屋。

## 44○御来屋の部屋 (N)

部屋はすっかり綺麗になっており、床にはゴミや紙きれは一切ない。御来屋の机の上にはパソコンにはシナリオが映っている。

パソコンの隣にはコピー機がある。

コピー機はシナリオを印刷している。

御来屋はパソコンの前に座りながら出来上がったシナリオを一部トントンと縦と横を揃えている。

揃え終わると、引き出しからホチキスを取り出し、シナリオをとめる。

そのシナリオをカバンの中に入れる。

カバンの中には、あの交差点で拾った台本が。

## 45○専門学校の入り口 (D)

沢村が立っている。

沢村「よ、遅かったな」

御来屋「早くから悪いな」

御来屋は沢村に駆け寄る。

沢村「はは、その代わり三脚はお前が持てよ」

カバンの中から台本を取り出す御来屋。

御来屋「これ」

台本を渡す。

沢村「おっ」

受け取ってすぐ名前を書く沢村。

## 46○専門学校廊下・階段を上りきったところ↓廊下

沢村「じゃ、機材取ってくるから、ここで待ってて」

御来屋「うん」

沢村が走っていくのを見ながら、周りを見渡す御来屋。

突然御来屋の動きが止まる。

御来屋の目の前には、「落とし物」と書かれたホワイトボードがある。

「落とし物」と書かれた下には、ボールペンやハンカチが置いてあったり、貼られていたりしている。

ボールペンやハンカチの隣には、場所と日時が書いてある。

御来屋はカバンの中から関口の台本を取り出す。

ホワイトボードに台本を貼ろうとして御来屋はやめる。

御来屋「読んで、いいよな」

御来屋は誰に言うわけでもなく、呟く。

そしてしばらくと、適当に台本を読み始める御来屋。

御来屋「なんだ、これ……」

その内容に違和感を感じ、慌てて表紙に戻す御来屋。

その表紙には……「ある未完の上にある映画」と書かれている。(この映画の台本)

強烈なノイズ音。

御来屋がぼっ、と振り返る。

目の前には関口が立っている。

御来屋「……この台本、関口さん……あなたのですよね？」

関口「あれ？意外と驚いてくれないんですね、残念」

関口は本当に残念そうに、笑いながら言う。

(メタ要素の伏線がいくつかフラッシュバック)

御来屋は関口を睨む。

御来屋「……あなたは誰なんですか？」

関口「そりゃあ、『この』映画の、ただの音響ですよ、前も言ったじゃないですか」

関口は笑顔を崩さず続ける。

御来屋「全く意味が判らない、いきなりなんだよ……」

関口「判りませんか？ 御来屋さん……あなた、下の名前は何ですか？」

御来屋「俺の、下の名前……」

関口「そうです」

不敵な笑顔の関口。

御来屋、自分の名前が出てこなくて呆然とする。

関口「……思い出せないのでしょう？ 出てこないでしょう？ 何故かって、設定されてない

からですよ、使われないから。適当な脚本家の元に生まれて損しましたね」

御来屋「そんな……」

自分の手を見つめる御来屋。

関口「で、貴方は、自分がいる世界が映画だということを、主人公でありながら知ってし

まいました。さて、これからどうなるでしょう？」

御来屋の表情が険しくなる。

御来屋「何が、言いたいんですか？」

関口がふふふ、と笑う。

関口「もちろん前提を突き崩された映画は、リアリティを失って大変なことになってしま

う。第四の壁と言っんですよね……あたりまえですよね？」

御来屋「さっきから何が言いたいんだよー！」

御来屋は叫ぶ。

関口の顔から笑顔が消える。

関口「消えてください」

関口の声音は明らかに先ほどより低い。

関口はポケットからナイフを取り出す。

御来屋はナイフに驚き、後ずさりする。

御来屋「本気なのか？」

関口「本気ですよ。スタッフの手を離れたキャラクターに用はありませんから」

関口はその声を合図に、御来屋にナイフを振る。

御来屋「お、落ち着けよ」

廊下に逃げ出す御来屋。必死にナイフをよける。

関口「落ち着いてますよ。私があなただを殺しても罪にはなりません。だって、自分たちが作ったキャラクターを消すだけですから」

関口はまた喋りながらナイフを振るう。

関口「ね？」

御来屋、そばにあった箱を関口に向かって投げる！

しかし、カットが切り替わると関口は主人公の横に立っている。むなしく壁に激突する箱。

関口「だから無駄な抵抗はやめてくださいよ」

御来屋「なんだよ、反則だろ…」

関口「貴方がなにやっても、カットを切り替えてしまえば…動きが連続していなくても構わないですよ」

御来屋「いくらなんでもおかしいだろ…」

関口「おかしいですけど構わない。私たち外の人間にとっては、作品のリアリティなんて何の意味もないんですから」

御来屋「そんな…」

関口、ナイフを振り下ろす。

それを「ある映画」台本でガードする御来屋。

ナイフ、台本に深々と突き刺さる。その際に御来屋が叫ぶ。  
御来屋「なんで、そんな俺を殺したいんだ！？」

関口、ナイフを引き抜き、三歩下がる。

関口「別に殺す訳じゃなくて、消すだけ」  
それを遮るように喋る御来屋。

御来屋「単に俺が第四の壁を破ったから、だけじゃないですよね」  
立ち上がる御来屋。

御来屋「関口さんは、なんでそんなに俺を嫌うんですか？」

御来屋は関口の目を見つめる。

関口、はっと笑う。

関口「良い機会だから言っておける」

カメラの方を向いて演説を始める関口。

関口「私は…私の企画は誰も面白いと言ってくれないし、監督すらやらして貰えない。呼ばれても、せいぜいこんなチンケな学生映画の音響でしょ」

その関口の様子を真剣に見ている御来屋。

関口「それなのに…映画の主人公だからって、監督やれて、テレビに出て挙げ句、障害も乗り越え撮影開始？ ふざけんなよー？」

御来屋「それ、ただの僻みじゃないですか」

関口「違っわ。…この映画がクソだって言ってるのよー！」

また鼻で笑う関口。

関口「物わかり悪いのね、シナリオ下手な人が作るとキャラまでバカになるのね」

ナイフを顔の前に持って来て状態を確かめる関口。

関口「貴方みたいなリアルじゃないキャラは消すの。それで、私の考えたとおりに撮ればこの映画はもっと面白くなる」

御来屋「考えたとおりに…？ そんな自分勝手なこと…」

関口「映画のシナリオに、それ以上の理由が必要なのかしら？」

勝ち誇った顔の関口。

しかし、御来屋は関口を睨みつけ、正面から立ち向かおうとする御来屋。

御来屋「…そんな無茶苦茶なこと…なるほど、貴女が監督できない理由が想像つきますよ」

死を覚悟する御来屋。それを見て関口も無表情になる。

関口「わかったような口を利くのね」

ナイフを見つめる関口。

関口「やっぱり嫌い。消えて」

ナイフを振り下ろそうとする関口。

しかし、そのナイフをさっと奪ってしまう櫻見。

櫻見「関口」

関口は刺されて倒れる。

櫻見「じゃあ、入って話でもしましょうか」

口をパクパクと動かすが声はでない御来屋。

ドアを開け教室に入っていく櫻見。

櫻見「…入らないの？」

上映体系になっている教室内。一人きり。

御来屋「櫻見さん、あなたなんてことを……」

御来屋は下を向く。

櫻見「御来屋君、あなた殺されそうになったのによくそんなことが言えるわね」

櫻見は御来屋を見て笑う。

櫻見「私が関口を殺してなかったら、御来屋君は死んでたわ、そしてこの映画は終わってしまっ。彼女根本的に勘違いしてるのよ、映画ってものを」

御来屋は一步後ろに下がる。

御来屋「だからって……」

櫻見「別に」

振り返る櫻見。

櫻見「映画の中で人を殺しても、誰かが死ぬ訳じゃないでしょ」

御来屋「……」

櫻見「それより座らないの？」

席を指す櫻見。

御来屋は座ろうとしなげ。

御来屋「貴女も、この世界が映画の中だって事知ってるんですか」

櫻見「その音響係に聞いたのよ、台本まで頂いたわ」

色つき表紙の台本をひらひらさせる櫻見。関口のものとは色が違う（バージョンが違っから）。

櫻見「まあ、貰ったのは準備稿で、内容はぜんぜんアテにならないんだけど」

御来屋「なんで、そんなことを……」

櫻見「さあ、彼女は単に御来屋君のことを妨害したかっただけらしいわ。貴方が順調に映画撮ってるのが目障りなんだって」

櫻見はゆっくりと椅子をひき、腰を下ろす。

櫻見「あのね、私はこの映画が終わって欲しくないの」

御来屋「え……？」

櫻見「この映画はあなたが映画を作り終わったら、終わる。そういう話、でしょ？」  
櫻見が目を細め、御来屋を睨む。

櫻見「だったら、貴方が映画を作りきらなければ、永遠に映画は終わらない……ということにならないかしら」

御来屋「…だからっ？」

櫻見「だからって…まあ、だから、貴方に映画制作を断念してもらいたいわけ。私が頼みに来たのはそれだけよ」

御来屋「俺に、映画を撮るなど……？」

櫻見は低い声を出す御来屋を見て吹き出す。

櫻見「はっ、そんな怯えなくても良いわよ。別に私は貴方を殺したりしないわ。映画の登

場人物同士が殺し合ったら大変なことになるでしょ？」

御来屋「…何故この映画を、終わらせたくないんですか」

座り直し、身を乗り出す櫻見。

櫻見「やっとそれを聞いてくれたわね」

画面がズームアウトを始める。

櫻見「私は映画を撮るのが好きなのよ。とつても、撮影現場が好き。出来た作品はなん

だつて良い、みんなで楽しくやれるのつて良いことじゃない？」

御来屋「それは目的と手段が逆転してる」

櫻見「違つわ。…貴方はなんで映画撮るの？」

御来屋「それは、映画を見てくれる人のために」

櫻見「勘違いね。もしくは正当化。言い訳としては上等ね」

御来屋「……」

櫻見「みんな、自分のために撮ってるのよ。学生映画なんて、そんなもの」

御来屋「櫻見っ」

櫻見は口角を上げる。

(ズームアウトの終わった画面は、撮影クルー達の写った撮影現場)

櫻見「だからこの映画は完結なんてしななければいいのよ、そしたらずっと私は映画を撮り

続けられる。あるいは、この映画の現場だつて、永遠に続く」

御来屋「見てくれる人のことはどうでもいいんですか」

御来屋はスクリーンのほうに向つて、指差す。

櫻見「そんなの居るの？ ねえ居るの？ どこにいるの、出してよ。せいぜい身内で

しょ？ 身内で見える映画なんて記念撮影以上の意味は持ってないわ」

カチンコが画面に入る。テイク1。

櫻見「貴方の行動は責任重大なの。だつて主人公ですもの」

御来屋「……」

櫻見「だからお願いしてるのよ、御来屋君。もう君が映画撮ることはないの。それで良い

でしょっ？」

御来屋黙つて顔を上げてスクリーンの方を見る。

御来屋の向こうのスクリーンに、突然この映画のエンドロールが流れ始める。

エンドロール。

48○教室  
エンドロール明け。

…それを見終わった御来屋、無言でぼーっとそれを眺めている。

49○専門学校・機材室

村山「残念だが、まあ仕方がない」

『退学届け』とかかれた紙に『村山』とかかれる判子が押される。

『退学届け』を受け取る、御来屋の手が映る。

50○文具屋

津川「そうか、ありがとう。じゃあ来週からは社員として働いて貰うよ」

津川は「ここに」こと笑っている。

御来屋「は？」

肯く御来屋の目にはクマがある。

給料袋を丁寧に開封する御来屋。

中からいっぴい、いっぴい、いっぴい、百田玉が転がり出てくる。

51○交差点

赤信号を待っている御来屋。

カメラの方に振り返って問う。

御来屋「これで良いのか？」

インサート。秋葉「次回作も楽しみにしてる」

52○教室

はっと顔を上げる御来屋。

そして、カメラの方をはっきりと向いて、観客に尋ねる。

御来屋「こんな終わりで面白いですか？」

そして、櫻見の方を向く御来屋。

御来屋「…これは、無いよ、さすがに」

櫻見「貴方の個人的な感情なんて知ったこっちゃありませんよ」

御来屋「いや、それはその通りだけどさ。それでも、見る人のためってのが映画の存在意義だと思う。こんな終わり、その原則に反してるよ」

櫻見「理解出来ないわ。さっきも言ったでしょ？ 学生映画は作り手のためにあるんだっ

て。見る人なんて抽象的な存在なんか気にしなくても一緒」

御来屋「貴女も、たいがいですよ」

笑う御来屋。

櫻見「何が？」

御来屋「大きな勘違いをしてる。見る人、少なくとも一人は居るじゃないですか」

櫻見、台本をばらばらつとめくって。

櫻見「何？ この文具屋の同僚？」

御来屋「違いますよ。それはまあ身内っちゃ身内です」

櫻見「…何が言いたいの？」

御来屋「いや、だから…最低でも一人は居るんですよ、この映画を見る人が」

カメラを向いて。

御来屋「ほら、ここ」

櫻見もカメラを向く。しばしの沈黙。

御来屋、カメラに軽く会釈をしてから。

御来屋「すみません、リテイクで」

驚愕する櫻見が一瞬写る。

× × ×

カチンコが画面に入る。テイク2。

直ぐに席を立つ御来屋。

御来屋「申し訳ないですけど、その話には乗れません」

櫻見「何故？ 意味が判らない。貴方は撮影楽しくないの！？」

御来屋は首を振る。

御来屋「いいえ、とても楽しいですよ」

櫻見「なら何故！？ 何故撮影を終わらそうとするの？ 学生なんだからもっと遊ぼう

よー」

必死の形相で叫ぶ櫻見。

御来屋「僕は遊びで映画撮ってるんじゃないんです」

淡々と返す御来屋。

櫻見「貴方が撮ってるのは映画じゃない！ 学生自主制作映画だ！」

御来屋「そうですね、でも、映画だ！ 俺は貴女と違って映画を撮ってる！」

櫻見は御来屋を睨む。

ドアへ向う御来屋。

櫻見「やめてよー！」

怒ったような、泣いているような顔で引き留める櫻見。

櫻見「撮影、終わっちゃおうよ…」

御来屋「貴女にとつて…映画は、撮られるためのものですか。撮るためにある物ですか」

すぎるような目で御来屋を見ている櫻見。

御来屋「俺にとつては…撮られるための物ですよ、やっぱり。目的と手段が入れ替わっ

ちや駄目なんじゃないかな」

ドアを開ける。廊下には何も無い。

振り返って、櫻見に対して…もしくはカメラに向かって発言する御来屋。

御来屋「俺は、撮りますよ。」「しかも、アレも、終わらせます…あなたのために」

ドアを閉める。

#### 53○専門学校・廊下

ドアを出ると、沢村が御来屋の方に歩いてくるのが見える。

沢村「おーい、借りてきたぞー！」

沢村が御来屋に手を振っている。

御来屋「沢村くん、現場行くよー！」

沢村の元に駆け寄る御来屋。

御来屋「それ貸してー！」

沢村「え、あ、おうー！」

御来屋は沢村が持っていたカメラと三脚を持つ。

#### 54○中華料理屋

中華料理屋に入るなり叫ぶ沢村。

沢村「つてか、ここ俺が前誘った所じゃねえかよー！」

奥から店長が出てくる。

西山「おお、来たかー。今日はがんばれよー！」

そちらを向いて挨拶する二人。

御来屋「はい、よろしくお願ひしますー！」

x x x

人でそれなりにいっぱいになってる現場。

撮影するテーブルの周りは照明が置いてあり、沢村が動きにくそうに準備している。キャストさん二人が椅子に座り、それに御来屋が台本を持ちながら話している。

御来屋「なので今日は中華屋のシーンを全部撮る感じでお願ひします」  
キャスト「はー」

御来屋「じゃあ、もうさっそく撮りますー沢村くんー」

沢村「はいはー」

御来屋は立ち上がり、照明を弄っていた沢村を呼ぶ。カメラの前に戻ってくる沢村。

沢村「じゃ、行くよー」

御来屋「シーン14、カット1、テイク1、よいい、アクションー」

× × ×

御来屋「カットー」

御来屋の声に沢村がボタンを押す。

キャストはふう、とため息をつく。

御来屋「お疲れ様ですー今日の撮影はこれで終了です」

掛け時計は5時(夕方)を示している。

後ろで見ていた西山が手を叩きながら景気よく声を出す。

西山「おーい、みんなご苦労さん！ いやあ、オッサンもなんだか青春を思い出して泣け

てきたよー」

テンションの上がってる西山。

御来屋「いえいえ、こちらこそ本当にありがとうございます」

西山「どつだい、いい時間だし、いっちょ飯食ってから解散にしないかい？」

キャスト「え、マジですかー？」

沢村「おー！ ラッキーー！ー」

御来屋「ちよっと待って。一人1000円まででな」

御来屋は給料袋を乱雑に破り、逆さまにするが小銭が出てこない。お札を引き出してそれを数える。

西山「あーいやいや監督さん、お代は良いよー」

御来屋「あ、いやいいんす、場所借りちゃってお礼出来ないのもあれですし、丁度昨日給料入ったんで」

それを横から見ていた沢村が笑う。

沢村「御来屋がおどるとこ初めて見た」

御来屋「どつという意味だよ、オイ」

西山を中心に、笑いに包まれる現場。

御来屋と津川が向かい合っている。

御来屋「すみません店長、俺映画の道を探します」

御来屋は津川に頭を下げる。

津川はそんな御来屋を見て、笑う。

津川「そっか、頑張れよ」

御来屋「はいー」

御来屋は顔を上げる。

その先には秋葉がいる。

津川「気が変わったら、いつでも言ってくれ」

津川は御来屋の横を歩いて去っていく。

秋葉は楽しそうに笑っている。

津川が見えなくなると、秋葉は御来屋に話しかける。

秋葉「よっ、未来の映画監督」

御来屋「盗み聞きか、秋葉くん」

秋葉「悪い、悪い」

頭をかく秋葉。

御来屋「まあ、いいんだけど。あ、あと、秋葉くん」

御来屋は鞆の中に手を入れると、ゴソゴソと探り始める。

秋葉「なに？」

秋葉は御来屋を見る。

御来屋「はー」

御来屋は一枚のDVDを秋葉に渡す。

秋葉「これ…」

御来屋「完成したからさ、観てくれよ、俺の映画」

秋葉は御来屋からDVDを受け取る。

秋葉「おっ！家帰ったらソッコー観る！」

秋葉は早口でそう言う。

御来屋は笑う。

御来屋「そうしてくれ、秋葉くんが観てくれて初めて、映画作った意味があるわけだから

な」

秋葉「おー、それは光栄です」

秋葉が笑う。

56〇専門学校・教室

「〇の字型に机が置いてあり、机のない方にはスクリーンが置いてある。スクリーンの横には石渡が立っている。」

石渡「では、以上で私の卒業制作のプレゼンを終わりにします」

石渡がお辞儀をすると、みんなが拍手をする。

石渡が席に戻る。

村山「次、御来屋の作品だ」

御来屋「はい」

村山の声に立ち上がる御来屋。

御来屋はスクリーンの前に立つ。

御来屋「この作品は…と、説明するのも今更かと思うので、ともかく見てください。」

これが、私の作品です」

御来屋の作品、というかこの作品のエンドロールが黒みから流れ始める。

エンドロール。

それを真剣に眺めている御来屋たちと、この作品のスタッフ。

END